

2千年前の 「漆塗り弓」と渦巻文様

紅葉山33号遺跡(花川南公園内)では、1982年の発掘調査で墓から弓が出土しました(写真1)。約2千年前(続縄文文化)のもので、弓本体の木質部分は残っていませんが、全面に塗られていた朱漆と、そこに描かれた渦巻文様は残っていました。文様は全部で11カ所に施され、各文様には少しずつ変化した渦巻文が描かれています(写真2)。また、弓の半ばから両端に向かい文様の色合いが黒色と茶色で分かれています。この弓が発見されてから40年がたち、道内各地で続縄文文化の遺物が数多く発見されていますが、弓にこのような文様を施す例は見つかっていないようです。

「漆塗り弓」が発見された墓では、他にも数多くの副葬品(葬られた人に持たせる生活用品や装身具など)が発見されました。その一つに、墓穴の最上部から見つかった「魚形石器」と呼ばれる石製漁労具があります(写真3・図1)。「魚形石器」は、北海道南部の続縄文前半期に特徴的な出土品で、紅葉山33号遺跡はこれまでに見つかった分布圏の最北に位置しています。また、墓底にまかれたペンガラ(赤い粉)の上部からは、ペンダント(環状石製品)も出土しました。発掘当時の所見によると、北海道東部の続縄文文化の遺跡で出土した石製の「環」に類似すると指摘されています。

紅葉山33号遺跡から出土した他の墓の副葬品全体をみても、北海道の北方と南方の中間的な要素がみられます。「漆塗り弓」に描かれた渦巻文様も、両文化圏との関わりとともに、そのルーツがどこにあり、その後どうつながっていくのかを探る必要があります。

9月16日(土)～11月19日(日)まで、国立アイヌ民族博物館(白老町)で開催される特別展「考古学と歴史学からみるアイヌ史展―19世紀までの軌跡―」に、紅葉山33号遺跡の「漆塗り弓」が展示されます。ぜひご覧ください。(荒山千恵)

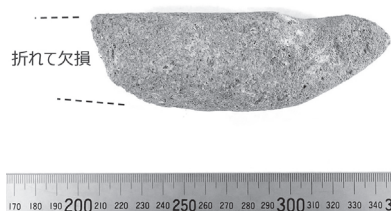


写真3 魚形石器／紅葉山33号遺跡

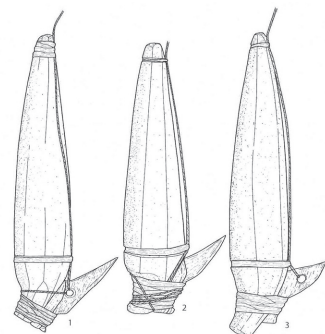


図1 魚形石器の推定使用図
(出典:高瀬克範 2022「続縄文文化の資源利用」吉川弘文館)

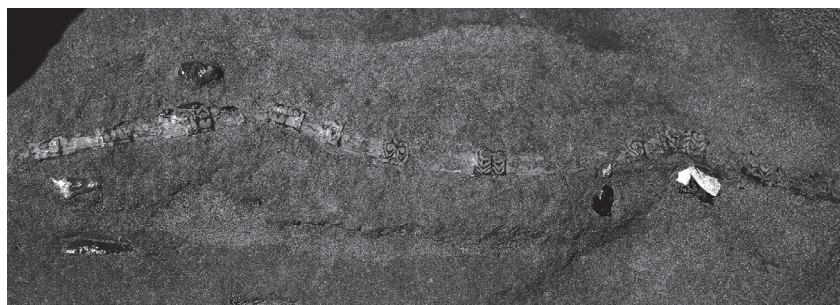


写真1 「漆塗り弓」の出土状況／紅葉山33号遺跡(写真:石狩市教育委員会)

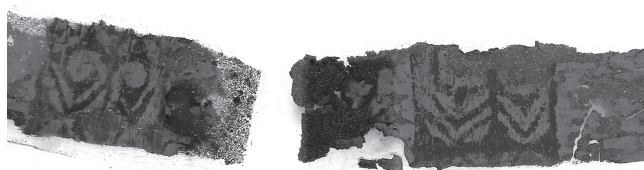


写真2 「漆塗り弓」に描かれた渦巻文様／紅葉山33号遺跡

※特別展の詳細は、国立アイヌ民族博物館のHPやチラシをご覧ください



石狩市学芸員
荒山千恵 Chie Arayama

専門分野は考古学。遺跡の発掘調査をはじめ、出土した木の道具、音の考古学などの研究を行う。

文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711 ※火曜休館